

年間第 16 主日 マタイ 13：24～30 過ぎ去るものと永遠のもの

私が司祭に叙階される前の中間期の 2 年（哲学期の 2 年を終えて神学期 4 年の間に実習を積む期間）、イエズス会の六甲学院で中高の先生をしました。

(<https://shomeiteam.wordpress.com/イエズス会の養成/>)

この六甲学院からたくさんの司祭の召し出しがあります。山口教会の百瀬文晃神父さんもそうですし、岩島忠彦神父さん（上智大学神学部でキリスト論などで大変お世話になりました）、佐久間勤神父さん（旧約聖書でお世話になって現在の上智学院の理事長）など、イエズス会日本管区の中心的な神父さんが学ばれています。神父さんたちは初代校長 武宮隼人校長から影響を受けています。

(http://www.rokkogakuin.ed.jp/public_html/academy/history/index.html)

武宮校長が大切にした言葉は石碑になっています「**すべては過ぎ去る。過ぎ去るものの奥にあるものを静かに考えよう。**」哲学期にお世話になった長町裕司神父さん（上智大学 文学部 哲学科 文学部哲学科長）は、高校時代、この石碑の意味を一晚、石碑の前で考えたことがありました。家族は家出じゃないかと大変心配をされたそうですが……。この言葉は、若い人に人生の意味を考えさせる力があります。

今日の福音で「両方（良い麦も毒麦も）とも育つままにしておきなさい」とイエス様は言われます。「毒麦」とありますが、毒を持っているというニュアンスではなくて、「雑草」「役に立たないもの」「麦の成長を妨げるもの」といった意味合いです。このようなものは、私たちの人生につきものです。生きていく上で本当に大切なことしかなければいいですが、邪魔をしたり悪い方に誘惑するものが混在しています。純粹培養のように生きられません。「朽ちてしまうもの」と「永遠の価値があるもの」、それらをどうしたら見分けられるのか？ 信仰生活の大きなテーマです。

私たちはとかく、「目の前のこと」「その場限りのこと」になびいてしまいます。毎日の生活・仕事は確かに大切ですが、永遠の価値があるものはどこにあるか？ 探し続けることがより大切です。私自身、幼稚園の 1 学期が終わりますが、金曜日に見つかった新型コロナウイルスの感染者のことで、お泊まり保育をどうするか？ 悩んでいます。その後は、来年度の幼稚園の先生の人事に頭を痛めるでしょう。悩みは尽きません。

「**すべては過ぎ去る。過ぎ去るものの奥にあるものを静かに考えよう。**」この言葉に中高生の多感な時期に出会った人たちが司祭の道に進みました。私たちはどうでしょうか？

「刈り入れの時」には、「毒麦」はすべて集められて束にして焼かれてしまう。それらは跡形もなくなってしまう。「麦（過ぎ去らない永遠の世界に触れるもの）」だけが倉に入れられて残る。 生活を見直す、ヒントにしましょう。